

論文の内容の要旨

論文題目 アンリ・ラブルーストに関する建築史的研究：
 パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流

氏 名 白鳥 洋子

ピエール＝フランソワ＝アンリ・ラブルースト (Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875) は、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 (Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850)、パリ国立図書館 (Bibliothèque nationale, 1854-1875, 工事 1860-1866) の 2 作品により知られる。記念碑的な公共建築に鉄構造が露出により使用された早期の事例であり、近代建築史においては鉄構造の新しい展開として技術的先進性から彼の建築の革新性が認められる。西洋建築史においては 19 世紀の古典主義に対して幅広い芸術表現を許容するロマン主義の興隆に貢献し、一方では合理主義を確立したと評されている。

ラブルーストが在ローマ・フランス・アカデミー奨学生として 1828 年に行ったパエストゥムの研究は復元の大胆性やその後の激しい論争が著名であるが、その研究と特徴や議論の焦点などその全貌があまり明らかではない。本稿は彼のパエストゥム研究の概要と特徴、アカデミーの論評、論争の解釈などを検証しながら議論の焦点を明らかにし、彼のパエストゥムの研究に新しい価値や意義を見出すことを目的としている。加えてサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館とパリ国立図書館に見られる構造の特徴の詳細を検証し、パエストゥムの研究がその源流の一つであったことを論じた。

序章では先行研究を概観した。20 世紀前半のギーディオンの論考により技術的先駆性の観点からラブルーストが近代建築の源流とする評価が確立された。20 世紀半ばにラブルーストのデュッサンの公的なコレクションが創設され、学術研究の契機となった。また、20 世紀後半と 21 世紀の先行研究を概観し、既に詳細が明らかにされた研究内容の確認を行った。20 世紀後半にはラブルーストの生涯と二つの図書館を始めとする主要な建築作品について研究が成され、これらによりラブルースト研究の概説が確立されたと見なされる。21 世紀のラブルースト研究にお

いてはさらに詳細な内容の研究や新しい観点からの研究が展開された。2つの図書館やその他の作品の詳細な研究に加えて、ギーディオンの論考の再読、イタリア時代のデッサンの分析とその建築史的な価値、フランスやオランダ、アメリカの近代建築に対する貢献などの研究主題に新しい傾向が見られたことを考察した。

第一章では同時代の人物による1970年代の文献を参考にパエストゥム研究と論争の経緯を概観した。パエストゥム研究はギリシア建築の研究を行なったこと、これらの神殿は古典主義が理想とする規範とは大きく異なる様相であったこと、バシリカの寄せ棟をはじめとして復元が大胆であったことなどが問題であったとされている。1828年のアカデミーの報告では先行研究であるドラギアルデットの著作との比較が成され、両者の研究の不一致が指摘され、測量の不正確疑惑へと繋がった。測量の正確性については在ローマ・フランス・アカデミー学院長オラス・ヴェルネにより再調査が成され、それにより研究の正確性が証明された。その証明書のアカデミーへの提出、その後の判決の訂正要求と棄却、ヴェルネの学院長辞職表明に至るまでの経緯を追った。

1870年代にパエストゥムの研究と論争は再び建築家達や芸術評論家達の論考の中で解釈された。そこからはこの論争は建築のみならず絵画や音楽の分野も含めた芸術界全体における古典主義に対するロマン主義の興隆が背景にあったことが明らかとなり、同時にパエストゥムの研究は理想としての古典と遺跡から理解される古代の姿との矛盾を提示するものであった。合理主義の建築家達の文献からは彼らがこの研究のイペートル形式の是非、石積み、自然な論理の思考などに着目していたことが明らかとなった。

第二章ではラブルーストのパエストゥム研究の詳細を把握し、その特徴の考察を行った。彼の研究はネプチューン神殿、ケレス神殿、バシリカの3つの神殿に加えて、都市の起源、様々な建造物の断片、都市壁と都市門をも含む広範囲なものであった。研究の中心はネプチューン神殿であり、内陣は屋根に覆われていたとする推論、二重のオーダーの技術的な観点からの分析、内陣は石造平天井であり、屋根と天井を別構造とした復元などに特徴があった。全体を通じて博識で緻密であり、古代遺跡の出土品の引用により雨仕舞と装飾を兼ねたディテールの復元を提示し、リファインメントを指摘した。結論として彼はポリクロミーを支持し、ギリシア世界におけるドリス式神殿の優位性を明言した。

ケレス神殿の研究においては材質による石材の使い分けの指摘、簡潔で知恵のある屋根架構に特徴があった。バシリカの復元は平面形式の特殊性から市民の建築として提案され、パウサニアスの文献が参照され、アテネのストア・ポイキレから想起されていた。中央軸の列柱が自然に棟を支えるとした構造の整合性から寄せ棟により復元された。小屋組は蜜蝋画法に被覆された露出部材により復元された。復元は考古学的な事例から引用され、構造の着眼には科学的な思考が見られ、自然な論理から導かれていた。ここには構造の機知のある着想や意匠と実利の主題を同時に解く姿勢が見られ、この研究が後のラブルーストの建築の源流をなしていたこ

とが理解できた。

第三章では 1828 年のパエストゥム研究に関するアカデミーの報告の詳細を分析し、アカデミーの見解の考察を行い、議論の焦点を明らかにした。論評の中心はネプチューン神殿であり、「イペートル形式の是非」、「石造平天井」、「水平材の接合方法」、「内陣の中間階の有無」などが議論の焦点であった。詳細な事項としては「雨仕舞」や「水切りの筋飾りの有無」が検討され、後者はシーマの起源として認められた。バシリカにおいてはトリグリフの有無が議論された。この審査ではドラギャルデットの研究が比較検討として参照され、両研究は異なる箇所と共通する箇所の両方があった。アカデミーの審査では詳細な事項が具体的に審議され、比例やオーダーなどの建築論は論じられなかった。全体を通じて批判的であり、最終的に「政府帰属」の判決が下された。ラブルーストのパエストゥム研究は古代ギリシア建築の実の姿を提示するものであり、19 世紀のフランスの建築界で古典として伝統的に信じられていたギリシア建築の姿の誤りを指摘し、それを刷新する内容であった。一方ではこの審査で否定的な指摘を受けた箇所の幾つかは彼の建築作品の中で反映された。

第四章ではラブルーストの主要作品である 2 つの図書館の構造に着目し、その特徴と詳細について論じた。パリ国立図書館では、彼の構造の最も特徴的である堅固な石造の壁面に繊細な鉄構造部が入れられた「箱入れ構造」について力学的特徴の分析を行い、ここでは鉄構造部の完全な自立性の実現され、水平力を分離する考え方が認められた。鋳鉄と練鉄の使い分けが成され、ペンデンティヴ・クーポールは内部空間の芸術意匠の豊かさに加えて、鉄構造部全体の安定性を高める役割を果たしていたことを解説した。

サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の構造においても同様な「箱入れ構造」が成され、水平力への着目とその分離の考え方が見られた。同図書館の鉄構造部の検討案の変遷を分析し、ラブルーストの鉄構造の考え方の特徴を論じた。石造壁面との接合部の分析を行い、ファサードの意匠を兼ねた接合部の円盤は「意匠と技術の主題を同時に解く」ものであり、ラブルーストの秀でた能力と個性を示していた。

ラブルーストの構造の大きな特徴は堅固な箱に繊細な骨組みを入れた「箱入れ構造」と、その基である水平力への着眼であると解釈された。こうした構造の特徴はラブルーストのネプチューン神殿の復元にも見られ、パエストゥムの研究はラブルーストの構造の源流であったと論じた。ネプチューン神殿の内陣の二重のオーダーが全くと言って良い程に水平力を受けない状態で復元が考案されたことは、内部の繊細な骨組みは水平力を受けないとする彼の生涯の構造の考え方を表していたと結論付けた。

結章ではこれらを振り返り、ラブルーストのパエストゥム研究の意義や価値について論じた。西洋建築史においては彼のパエストゥム研究は古典主義の終焉とロマン主義の興隆を告げるものであったと解釈され、近代性においては自然な論理の思考において意義があり、ラブルース

ト自身の建築においては新鮮な古代の意匠、芸術と科学の同時性の思想、「箱入れ構造」においても源流であったことに意義を見出した。新しい価値として 18 世紀の革命期の建築に見られるオーダーとドームまたはヴォールトを載せる構成との関わりが挙げられ、グレコ・ゴシックの理念、楣構造と控え壁の構造の融合にラブルーストの建築は新しい展開を加えるものでもあった。近代建築においてはギーディオンやコルビュジェがラブルーストの建築作品のみならず、パエストゥムの研究にも価値を見出していたことも新しい認識であった。

ネプチューン神殿の外周の重厚なオーダーと内陣の二重のオーダーの繊細さと軽やかさは、ラブルーストの 2 つの図書館の堅固な石造の壁面と繊細な鉄構造の骨組みの「箱入れ構造」と「独立柱の空間」、「意匠と技術の同時性」において同様な考え方であり、パエストゥムの研究は彼の建築の源流であったことが良く理解できた。水平力へ着目した繊細な骨組みの構造は近年の優れた現代建築の主題でもあり、ここにもラブルーストのさらなる価値を見出すことができる。彼のパエストゥムの研究と建築作品に見られる価値は、古代ギリシアから現代までの様々な時代で取り組まれた主題、独立柱の空間と水平力への着目とその分離構造であったと論じた。